

## いづれ／＼うち談義

第二回

## 住まいからの旅立ち

「家」という言葉はとても広い意味をもつ。家屋そのものでもあり、家系、家族も指せば、その背景、しがらみまでも想像させる。住むところのすべてを含んでくれそうである。

その「家」には仲間の言葉がいくつもある。「住宅」、「住まい」、「住み家」などである。

誰にでも住んでいるところがある、なければ安心して寝られない。そこを〈モノ〉として扱う、自分達を入れてくれる〈容器〉のように扱う。

また、いくらで買う、いくらになる、

持つておけば安心だ、お金のかわりにしておこう、ローンがいくらで、何年で返す、といったように〈財産〉として扱う。

また、何軒建つとか、造られるとか、多くなった、と〈数量〉的に扱う。そういうときには「住宅」という言葉はいい。

ところがそれを、モノのような容器でもなく、財産でもなく、統計的に扱うのでもない、住んでいるところはもともと人間とくっついていてのだから、もうすこし人間に近づけて、住んでい

るひとつつけてみる、そんな柔らかい言葉として、「住まい（あるいは、すまい）」がある。

生活と合わせて感じられる。住宅とつきあう、人間のあり方、居住をのぞかせてくれている。

さらに、「住み家」または「棲み処（または住みか、住処、棲み家）」となると、住んでいる生きもの、この場合人間、に近づいてさらにどの生物にもみられる、生存のよりどころとしての住み場所、のイメージをいだけさせる。

人間にとっては「住み家」は「住まい」のさらに奥に控えてある、身近で自然なもののようにみえる。

ところで、一九八〇年代には、この住むところを、「家」や「住宅」ばかりでなく「住まい」や「住み家」として、論考や論議をすすめるのが盛んになった。「住まい」や「住み家」のもつニュアンスが歓迎されたのである。

七〇年代に日本人の「住まい」にっ

いて探求された研究などの蓄積があったからであるし、例の「ウサギ小屋に住む働き中毒の日本人」と外国から指摘を受けた直後で、日本人の住宅の質をなんとかあげたいという意欲も随所に見られた。

また国際的にも「居住年」などという機会もあって、住む人の居住に関心が向いていったこともある。

要するに「住宅」を分析するのに、さらに人間や人間の内面に接近していきはじめたときであった。

その八〇年代は経済も右肩上がりで、末年にはバブルがはじけるまでに向かう。なんでも手に入れられると思えるほど、モノやモノづくりに活気が見えた。それはうらを返せばつくり手サイドの時代、つくり手が視覚上の引力をつかって使い手を誘導する、いわゆるスタイル重視の時代でもあった。

自分の欲しいものが自分でつくれない。しかしそれは至難の業とな



え・安原喜秀

る専門家代行してもらおうしかない。「住まい」はどうしてもつくり手の導くデザインからはじまる。

自分達の欲しいものは「要求」というかたちですくいとってはくれる。けれどつくられて自分達の手にとどく道のりはけわしく、自分達のところにとどくものになるのも容易ではない。

私たちは「住み手のところ」はなかなか満足しないという事態にたちつく

していた。

そこで「住まい」が、もつとひとのところに近づかないか、どうすれば「住み手のところ」が自信をもって「住まい」に対峙できるか、と考えていた。

いや「住み手のところ」なんかじゃない。「住み手」とは、つくり手を暗に想定してはいないだろうか。

もつと「住まい」はひとのものだ。ひとのためにどうあるのか。いっそここは、つくり手サイドからの情報と思い込みを一度遮断してみよう。

ひとのころにとつて「住まい」はどのようなものなのか。そこから見よう。その最良の状態を想像する。そのためにどのようにつくろうかなんていうのは二の次にしよう。

ひとは「住まい」にかける「思い」がある。まずは、その「思い」を探ることからはじめてみようではないか。